

●書学書道史学会

会報

第8号

平成16年(2004)10月1日発行

編集・発行
書学書道史学会
事務局

東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)5489-7288(直)

大きな違いがある。現存遺品の中で、概して、前者の場合は典籍（漢籍・国書）や古文書・仏典などを、後者は歴代能書の名筆やかな古筆などを想定できる。

第十五回書学書道史学会大会記念シンポジウム基調講演

「和の心—書の文化継承に向けて」（要旨）

古谷 稔

われわれの日本語は、「漢字」と「かな」を基本にして表記される。本来、固有の文字をもたなかつた日本人は、大陸から伝わった漢字の音と訓をもつたらきを応用し、漢字からかなを生み出すなど、自國語を書き表わすことに成功した。こうして生まれた書の背景には、文学のめざましい発展とともに書の美が追求され、一方、大陸から伝來した筆・墨・紙の製法にも独自の工夫を加え、中国・朝鮮とは異なつた日本特有の書道藝術が開花した。

「書」には、本来、「書く」「文字」など“じよ”的意味を表わすほか、その人の思想を著わした學問あるいは書物など“ふみ”的意味がある。そこには、書かれた内容とともに、それを著わした“人”に価値觀が置かれ、これに加えて料紙や書風の美も尊重され、それらが渾然一体となつて、「書」としての本来の姿がとらえられるものと考えられる。

このような「書」は文学性と藝術性の両面性を備えているが、同じ内容でも、それが単なる写本であるのと、書の美を重んじたものとでは、

書道史上に目を転じてみると、「書」の文化は宮廷を中心に育まれ、各時代に創意工夫を加え、多様な書風を開拓する。飛鳥・奈良時代では、中国の仏典・写経・典籍などの遺例を見ることができるが、それらは東晋や隋・唐などの大陸の中国書法を受容し、自然、美の評価はそれらが基準とされたであろう。平安時代に入ると、初期においては空海・嵯峨天皇・橘逸勢など“三筆”的能書によって、中国書法の受身的な書風でなく、漢文学の隆盛を導くとともに独自に書法が開発され、日本の美を目指した文化の指向性が取看される。中期の小野道風・藤原佐理・藤原行成の“三跡”らはさらなる開拓を加えて優美な和様書道を確立し、白居易の『白氏文集』を和様で表現できるまでになつた。同時に和歌や消息など貴族生活において不可欠のかなの書も洗練が施され、和様漢字を凌ぐ勢いでかな書道が盛んになり、今日では古筆といえど唐朝のかなを指すほどに日本の書の代表的生存となつた。鎌倉から室町にかけての中世も同様、大陸の影響をうけつつ、それまでの伝統を踏まえながら、武家社会の中で氣迫に満ちた禅林墨跡や流派の書を生むに至つた。ルネサンスともいいうべき桃山の斬新な文化は、書道史でも本阿弥光悦・近衛信尹・松花堂昭乗らによる和様が特筆され、次の江戸時代にその伝統を送り込み、一方では大陸からの明・清の文化が江戸の儒者や文人に影響を及ぼし、和様に対する唐様の繁栄をもたらし、“幕末の三筆”など、多くの唐様書家を輩出した。

このように、江戸以前を顧みると、そこには“和漢”的因果関係または対立関係が容認され、日中の文化交流やその後に芽生えた日本文化の

独自性が窺える。

ところで、近現代の「書」はいかがであろうか。明治に入り、鎖国の中日本は世界へ門戸を開き、内国勧業博覧会の開催をはじめ、展覧会という形で美の鑑賞が行われるようになり、「書」に対する認識も変化した。面目を一新した中国書学研究の方法論や日本の古筆研究なども注目され、それらを基盤に「書」の研究や制作が試みられてきた。戦後には書が日展の五科に属するに至り、活発な動きを見せたが、二十一世紀初頭のい

ま、往時の盛況は陰りを見せる。この際、書学と書作のあり方を検証するとともに、「書」というものを世界的視野の中で構築することはきわめて重要であり、時宜を得た検討課題と考えられる。「書」の活性化を考えるとき、日本の伝統文化に潜むする「和」の心を基盤に、新鮮な美を開発することこそ、世界に発信できる日本の「書」が生まれるのではないかろうか。

【第15回大会関係各種連絡事項】

- 本学会の大会は例年、役員が在籍する大学等に会場を提供願って開催する習いですが、今年は第15回の節目の開催を記念する主旨で、15年前に第1回大会を開いた東京大学／法文2号館で開催する構想のもと、平勢隆郎会員（東京大学東洋文化研究所）にご協力頂き、さらに平勢氏のご紹介で同大文学部の吉沢誠一郎氏（東洋史）＝本学会非会員＝にご尽力頂いて開催の運びとなりました。両氏に厚く感謝申し上げたいと思います。
- 会場の東京大学／法文2号館は、本郷の同大正門を入ってまっすぐ正面に見える安田講堂を目指して約100メートル、右手の建物です。発表会場は館内の1番大教室（第1会場）と、2番大教室（第2会場）で、いずれも階段教室です。
- 大会参加費（資料代込み）は、例年の通り会員（同伴者含む）3,000円、学生・院生会員および会員の同伴する学生・院生は2,000円。6日（土）の昼食弁当代は1,100円、また懇親会費は6,000円です。
- 大会参加、懇親会参加、昼食弁当申込み等は、「大会参加申込ハガキ」に必要事項を記入して事務局宛送付のうえ、大会専用の振替用紙でご送金下さい。大会関係のご送金は11月2日必着とします。なお、年会費の納入は、混乱や処理ミスを避けるため大会用とは別の振替用紙をお使い下さい。
- 懇親会場は現在選定中です。御茶ノ水、神田、または池之端地区を予定しています。
- 7日（日）の大東文化大学／板橋校舎・中央棟多目的ホールでの記念シンポジウムは、9時30分受付（前日の6日に東京大学会場で受付を済ませている方は、受付不要です）、10時開始、12時30分終了です。引き続き、別棟の同大書道学科棟専用ギャラリーほかでの特別鑑賞行事が12時30分～15時30分の予定で組まれていますので、昼食は適宜にお願いします（7日については事務局では昼食の手配を致しません）。
- 記念シンポジウムの担当発言者は、次の通りです。（カッコ内は学会役職）
 - 【基調講演】古谷 稔氏（常任理事・国内局長）
 - 【パネラー】金子卓義氏（会員）、萱のり子氏（幹事）、河内利治氏（理事）、中村伸夫氏（常任理事・編集局長）、野中浩俊氏（監事）、横山弘平氏（会員）
- 今年の大会は東京での開催でもあり、事務局ではホテル等の手配は致しません。
- 大会当日の緊急連絡先は、事務局長の携帯（090-3084-8561）とします。

本年度の第15回書学書道史学会大会の詳細をお知らせします。大会は11月5日(金)から7日(日)までの3日間にわたり、東京大学／法文2号館、大東文化大学／板橋校舎ほかで行います。日程並びに発表者等以下の通りです。奮ってご参加ください。

ご参加の申し込み等は、同封の参加申し込みハガキで10月28日までにお願いします。

〈日 程〉

【11月5日(金)】

16:30~ 第35回定例理事会（会場未定）

【11月6日(土)】

会場：東京大学／法文2号館

9:00~ 受付

9:30~10:20 平成16年度総会

10:30~12:30 〈第1会場／中国部会研究発表〉

①「曹全碑小考—城外本と『因』字の形体を中心に」矢野千載(盛岡大学)

②「天發神讖碑の筆法の源流とその背景」佐藤法雄(専修大学)

③「北朝摩崖刻経中の『大空王佛』佛号を主にした書風剖析と安道壹の考察」相川政行

〈第2会場／日本部会研究発表〉

④「手鑑月台に見る近代という眼差し」高橋利郎(成田山書道美術館)

⑤「近世日本の篆書受容について—細井広沢を中心に—」岩坪充雄

⑥「明治維新における公文書書体転換の一様相—藩士が見た『布達』の書体と記録した『留』の書体」青山由起子(神戸大学大学院)

12:30~13:30 昼食休憩

13:30~14:50 〈第1会場／中国部会研究発表〉

⑦「五代から北宋初期の文人の狂草観」松永恵子

⑧「明王府本石刻蘭亭図巻の特質とその意義—日中をめぐる後世への影響」鈴木洋保(京都女子大学)

〈第2会場／日本部会研究発表〉

⑨「日蓮の消息について—『四条金吾殿女房御返事』を中心に」川上大隆(大東文化大学大学院)

⑩「与謝蕪村の書—書法に表れた漢語認識と和語認識の区別」魚住和晃(神戸大学)

14:50~15:00 休憩

15:00~16:20 〈第1会場／中国部会研究発表〉

⑪「上海図書館蔵『稷山論書絶句』について」菅野智明(筑波大学)

⑫「偽刻者Xの形影—同手の偽刻北魏洛陽墓誌群」澤田雅弘(群馬大学)

〈第2会場／日本部会研究発表〉

⑬「新出『香紙切』二種二葉考」高城弘一(大東文化大学)

⑭「『古今集』仮名序における虚構—安積山の歌をめぐって—」森岡隆(筑波大学)

16:30~17:20 記念シンポジウム基調講演

○「和の心—書の文化継承に向けて」古谷稔(大東文化大学)

18:30~ 懇親会(会場未定)

【11月7日(日)】

会場：大東文化大学板橋校舎／多目的ホール

10:00~12:30 記念シンポジウム「書学と書作」

パネラー：金子卓義、萱のり子、河内利治、中村伸夫、野中浩俊、横山弘平

12:30~15:30 宇野雪村文庫拓本コレクション特別鑑賞

—《研究発表レジュメ①》—

曹全碑小考 —城外本と「因」字の形体を中心に—

矢野 千載

曹全碑の拓本には、城外本と称される出土後間もない明代萬曆年間初期に採られたものがある。それは碑陽一行目末尾の「因」字が欠損していない唯一のものであるとされる。『增補校碑隨筆』には城外本の名が記されているが、その文字を見ることは影印本でも出版されない限り、一生不可能かと思われた。ところが上海博物館で偶然にも目にすることができる、あまり鮮明ではないがその一部分を撮影することができた。

本発表では、曹全碑の城外本と因字について、以下の観点から迫つていきた。

- ①因字が含まれる城外本第二葉の二十八文字について、明代未断本の数種の拓本・清代已断本の精拓と比較検討を行い、それぞれの特性を考える。
- ②城外本の因字について、拓本に遺された形体が碑面に刻字された当時の姿のままなのか、他の漢碑等の字例を参考に考える。
- ③何紹基は多くの漢碑の臨書を行つたが、曹全碑の臨書には因字が書かれてある。その意味するところを考える。
- ④因字の字例は、甲骨文・金文・隸書・楷書・行書・草書と多くの書体があり、そして楚簡・秦簡・漢簡等の新出土の肉筆文字資料にも確認できるほど豊富である。因字はほぼすべての書体で「口」と「大」の筆画で構成され、布団の上に大の字に寝た人の形と解釈されるのが通例となっている。しかし、隸書や楷書の一部には、内側の筆画が「大」ではないものがある。内側の筆画が隸書では「工」・「土」、楷書では「工」・「ユ」・「コ」のものも認められるのである。現在でも楷書の因字として「匄」の字形が全く用いられないとも言えまい。これらの字形の多様化について、隸変段階に注目して因字の形態変化を考える。

—《研究発表レジュメ②》—

天發神識碑の筆法の源流とその背景

佐藤 法雄

天發神識碑が書かれたのは、吳の天璽元年（二七六年）である。三国時代に入り、隸書はその盛りを過ぎ、次第に楷書へと移っていく過渡期に、篆にも非ず、隸にも非ず、一種奇古な書が、まるで時代に逆行するかのように出現した。書体は明らかに篆書であるが、書き振りが隸書に近いと見られ、篆書を隸書の筆法で書いたものとされてきた。しかし実際にこの書の臨書を試みると、起筆、転折、収筆共に隸書の筆法だけではどうしても再現出来ない点画があることに気付く。原字との乖離については、意図的刻法によるものという考え方もあるが、よく観察すると細部に亘って非常に丁寧で、しかも忠実に刻しているように見える。

すると、天發神識碑は通常の紡錘状の筆を以てしては、点画の再現は困難であり、別の筆によるしか再現不可能という考えに至つた。ではどの様な筆か？恐らく刷毛ではないかと思う。刷毛で書けば、起筆、収筆、転折等の微妙な部分が無理なく再現できる。

また、この書は、漢碑の額法の伝承によつたものではないかとう説があり、その中で最も近似している「白石神君碑」の篆額も刷毛で書かれているように見える。天發神識碑に強い影響を受けた金冬心は、その特異な書の創造に、やはり刷毛（漆筆）を使用していたと考えられる。

刷毛で書く書といえ、飛白が思い起こされるが、漢代に発生したと言われるもの、唐以前のもので文字資料として見ることができるのは稀である。飛白や散隸をはじめとする当時の雑体書との関わりも考えられる。

また、書体は別種であるものの、筆法上、梵字とも極めて酷似している。

さらに、これらの書には、筆法だけでなく思想的背景においても共通点があり、いずれも神聖なもの、あるいは權威を示すためのものとして書かれている。そのようなものを書く時には筆を含め、特別な書法を用いるといった伝承があつたのではないかということを、実証的に解明して行こうと思う。

《研究発表レジュメ③》

北朝摩崖刻経中の『大空王佛』佛号を 主にした書風剖析と安道壹の考察

相川 政行

泰山、徂來山、鄒城市四山（鐵山、崗山、葛山、尖山）、嶧山、水牛山等に刻された北朝摩崖刻経（經文、佛語、佛名）については既に書道史上特異な書風や榜書等として注目されて来た。が近年、書院山、二鼓山、大塞山、雲翠山、洪頂山、司里山、銀山等いわゆる山東省東平、平陰、滕州地域の諸山や微山湖に近い陶山にも、佛号や經文摩崖が多く発見され、南北響堂山等の刻経とをすべて合わせグローバル的に研究が進められべく、近時の国際学会も開催され、佛教学的、書学書道史的にもその研究成果が発表されている。中でも洪頂山南北の巖壁への摩崖諸刻はここが、积法洪及び安道壹を代表する教団の中心的活動基地であつた事は誰しも今日認めるところである。今回発表する標題は、これら諸山に多く刻書された『大空王佛』佛号の多様な書きぶりを剖析考察する。また、鐵山の『石頌』中の安法師の書法上の記述や、洪頂山中の积法洪、安法師題記とも関連し、次の項目内容をもつて発表する。

一、線刻の考察

（1）双鉤刻—文字完刻、未完刻（2）双鉤刻の前例（3）界線の

意義（4）圖線

二、書論から見た佛号の字様、榜書の考察

（1）包世臣『書法津梁』、康有為『広藝舟雙楫』、王虛舟『論書贅

語』等から匠意（奇例）を挙げる。

洪頂山『大空王佛』の大字、接筆第三画の起筆を離し六、九の字様に造形する。則ち「位置等均」に反して奇である。その字様の導源検討（2）用筆法、永字八法等からの考察（3）頂戴論、空、王二字の最終画短筆の検討（4）垂曳論、垂脚、懸針の長引。佛字の最終画、漢代木簡の年字、漢碑中の命字垂筆。劉熙載『書概』では草書論。西川寧『猗園雜纂』は鄭君覚『独笑齋金石文考』を引用、國家景命延長説。発表者は両説を取る（5）掠法『大集經』の中の字例にも触れ、智永の八法で解明。

五代から北宋初期の文人の狂草観

松永 恵子

「狂草」は、東晋の王羲之を正統とする伝統的な書から逸脱し、それ以後の草書に影響をもたらしたとして、中国書道史上重要な位置づけがなされている。狂草を書いた代表的な人物として、張旭と懷素がいる。例えば、唐の李肇『唐国史補』卷上に、「張旭、酒を飲めば輒ち草書し、筆を揮うて大いに叫び、頭を以て水墨中に搘してこれを書す」とあるように、張旭や懷素が活躍していた中唐頃から晚唐に至るまで、その草書の狂逸さがもてはやされ、多くの詩人の詩に詠われた。さらに、北宋に至ると、蘇東坡や黃庭堅らが、張旭と懷素の狂草を高く評価した。特に、黃庭堅は彼らの書に深く傾倒し、自らの書においても実践を試みたのである。しかし、蘇東坡や黃庭堅とは対照的に、米芾は張旭の書を否定的に見ており、懷素の書には僅かながらの好感を示しながらも、やはり彼らの狂草を古法に悖るものであるとみなしているようである。

これまで、蘇東坡・黃庭堅・米芾らを代表とする、北宋中期における唐の狂草觀については、度々論じられているが、特に五代から北宋初期の文人達が狂草をどのように見ていたのかについては、従来殆ど論じられていないようである。「狂草」は王羲之以来の伝統的な書を一変したとして、中国書道史上、革新的な書風の現れの一つと見なされている。しかし、五代から北宋初期の文人達が狂草をどのように批評しているのかを見ることによって、晚唐から北宋中期へと繋がる草書の流れがより鮮明になつてくるのではないかと考えられる。本発表では、蘇東坡・黃庭堅・米芾らの前史を知る意味で、特に五代から北宋初期の文人の狂草觀について述べてみたいと思う。

《研究発表レジュメ④》

五代から北宋初期の文人の狂草観

松永 恵子

「狂草」は、東晋の王羲之を正統とする伝統的な書から逸脱し、それ以後の草書に影響をもたらしたとして、中国書道史上重要な位置づけがなされている。狂草を書いた代表的な人物として、張旭と懷素がいる。例えば、唐の李肇『唐国史補』卷上に、「張旭、酒を飲めば輒ち草書し、筆を揮うて大いに叫び、頭を以て水墨中に搘してこれを書す」とあるように、張旭や懷素が活躍していた中唐頃から晚唐に至るまで、その草書の狂逸さがもてはやされ、多くの詩人の詩に詠われた。さらに、北宋に至ると、蘇東坡や黃庭堅らが、張旭と懷素の狂草を高く評価した。特に、黃庭堅は彼らの書に深く傾倒し、自らの書においても実践を試みたのである。しかし、蘇東坡や黃庭堅とは対照的に、米芾は張旭の書を否定的に見ており、懷素の書には僅かながらの好感を示しながらも、やはり彼らの狂草を古法に悖るものであるとみなしているようである。

これまで、蘇東坡・黃庭堅・米芾らを代表とする、北宋中期における唐の狂草觀については、度々論じられているが、特に五代から北宋初期の文人達が狂草をどのように見ていたのかについては、従来殆ど論じられていないようである。「狂草」は王羲之以来の伝統的な書を一変したとして、中国書道史上、革新的な書風の現れの一つと見なされている。しかし、五代から北宋初期の文人達が狂草をどのように批評しているのかを見ることによって、晚唐から北宋中期へと繋がる草書の流れがより鮮明になつてくるのではないかと考えられる。本発表では、蘇東坡・黃庭堅・米芾らの前史を知る意味で、特に五代から北宋初期の文人の狂草觀について述べてみたいと思う。

会 報

《研究発表レジュメ⑤》

明王府本石刻蘭亭図巻の特質とその意義

—日中をめぐる後世への影響—

鈴木 洋保

ここに取り上げる蘭亭図巻は、当初、永樂十五年（一四一七）、明の太宗の孫、周憲王朱有燉（一三七四—一四三七）によって刻され、その後、益宣王朱翊鈞（？—一六〇三）によって重刻増補されたものである。今日、流布しているのはこの重刻本系に当たる。

この図巻の全体構成は嘗てなかつたもので、蘭亭図の他、蘭亭叙、蘭亭叙をめぐる諸家の説などが一つにまとめられている。蘭亭図には、曲水にそつて人々が描かれ、各人の名と詩が書き込まれている。諸家の説としては長短交え三十則足らずの抄録が見られ、趙孟頫の蘭亭跋から多く引かれている。

本図巻は流布本で見る限り、それほど精彩のあるものでもなく、趣味的なものとして軽視され、これまで研究対象とはならなかつたのであるが、文化史的には、書画の両分野において、日中に跨る大きな意義を持つものである。

本発表では主として以下の諸点について述べるつもりである。

- 1 朱有燉と朱翊鈞の二跋に見る、本図巻の成立とその問題点。
- 2 創意の全体構成をめぐつて。
- 3 諸家の説と朱有燉の書法観。
- 4 蘭亭図の特性とその後世への影響。

本蘭亭図巻については、平成十五年八月十日の第24回書論研究会大会において、「墨拓本蘭亭図巻をめぐつて」と題して、その成立と後世への影響などについて発表したが、検討の十分でなかつた面もあり、ここに新たな角度から再論するものである。

上海図書館蔵『稷山論書絶句』について

菅野 智明

清末の能書家、陶濬宣（道光二七・一八四七～民国四・一九一五、異説あり）の『稷山論書絶句』（原題『稷山論書詩』、光緒十八・一八九二年脱稿）は、包世臣『芸舟双楫』論書・論書十二・絶句に倣い、往時注目された北碑を中心に、七絶百六十二首（注1）を詠じ、それに詩注を加えた壮大な書論である。目下そのテキストは、中国國家図書館、上海図書館に各々稿本・鈔本が蔵されるのみで、その全容は今もって公開されていない。発表者は、旧稿（注2）において、国家図書館蔵本の披見部分（冒頭から第五十八首三句目まで）から、包世臣理論の批判を通して阮元理論支持に傾くその論旨をはじめとして、この著の概要について報告しているが、このほど上海図書館において、所蔵の該著を全篇にわたり調査する好機を得た。全篇の披閲は、発表者にとって今般が初めてである。本発表では、この上海本の調査から得られた新知見を報告するとともに、それを踏まえ、近代北碑論におけるこの書論の位置についても、改めて考察することにしたい。

(注1) 今回の調査で当初の百一首のほか、巻二六十一首の存在が明らかになつた。

(注2) 抽稿「北京図書館蔵『稷山論書詩』尋釁（上）（下）」（福島大学教育学部論集・人文科学部門）六五・六六号、一九九八（一九九九）、「稷山論書詩」の北碑論（『中国近現代文化研究』二号、一九九九）、「陶濬宣『稷山論書詩』をめぐつて」（『日中人文科学交流協会創立二十周年記念・日中学術シンポジウム論文集』、二〇〇〇）

—《研究発表レジュメ⑦》—

- 1 崔隆墓誌
2 吳子璿妻秦夫人墓誌
3 馮子璿妻孟夫人墓誌
4 □伯超墓誌
5 元質墓誌
6 張徹墓誌
7 王遷墓誌
8 康建墓誌
9 譚棻墓誌
10 吳方墓誌
11 李延齡墓誌
12 吳墳墓誌
13 劉昭墓誌
14 周恒墓誌
15 寇慰墓誌
- 1、4、11を除く一二誌には、すでに偽刻説が行われているが、その根拠については、7を除いて明記するものがない。またこれらの中には、偽刻と扱わない工具書もあるなど、偽刻説はまだ十分に定着していない感がある。一方、1、4、11の三誌には偽刻説を見ず、1、4の二誌は『洛陽出土北魏墓誌選編』に真刻として収録されている。

偽刻者Xの形影

—同手の偽刻北魏洛陽墓誌群—

澤田 雅弘

同手の偽刻が一定量あり、その間には偽刻者自身の成長が認められ、書風の転換を図つたらしい様子も察せられるとなると、その偽刻者は偽刻の実態を伝えるモデルとして興味深い。

発表では、右の関心から、以下の北魏洛陽墓誌十五件が同手の偽刻であることを、字画の比較を通して明らかにする。

- 正始二年(五〇五)三月
延昌元年(五一二)二月
延昌元年(五一二)二月
延昌二年(五一三)□月
延昌三年(五一四)六月
神龜元年(五一八)八月
神龜二年(五一九)二月
正光五年(五二四)六月
正光五年(五二四)六月
正光五年(五二四)六月
孝昌元年(五二五)十月
孝昌二年(五二六)八月
孝昌二年(五二六)十一月
孝昌四年(五二八)九月

書に限らずあらゆるモノは、その評価によってその意味を増減し、変する。近代という評価の眼差しを意識することによって、現代の書に失われた本質的な文脈を多少なりとも明確にしたい。

手鑑月台に見る近代という眼差し

高橋 利郎

大口周魚が編集した手鑑、月台は近代に制作された手鑑として独特の排列を有している。これは周魚の書道史観を反映しているものと見ることができる。

国宝の四大手鑑に代表される近世的な断簡の排列は、社会的階級を反映したものであると同時に淳化閣帖などの集帖をそのモデルとしているとの指摘がある通り、書蹟を通して伝称筆者を含む書き手の「顔」をも鑑賞するためのものである。一方、月台においては、敢えて排列を単純化することによって「顔」の要素を排除し、書蹟そのものの優秀性や資料としての意味を浮彫にしている。近代に芽生えた書をモノとして冷静に見つめ直す方法が、この手鑑の排列に色濃く影響したのである。言い換えれば「顔」から「書蹟」へという評価の変遷をこの手鑑に見ることができる。

高橋 利郎

—《研究発表レジュメ⑧》—

—《研究発表レジュメ⑨》—

近世日本の篆書受容について —細井広沢を中心にして—

岩坪 充雄

今回の発表の主題は、江戸時代において、篆書はどのように受容されていったのかを概観することにある。

「篆書」は書体発展の歴史に照らせば、発生は楷書・行書より古いのだが、漢字輸入国である本邦においては、却つて新しい書体として受容されることになった。そのため篆書作家として名の残る書家を輩出するようになるのは近世。江戸時代に入つてからのことである。それゆえに江戸時代に篆書がどのように受容されたものかを研究することは意味なしとしない。さらに江戸時代の篆刻流行は篆書受容を考える上で一つのトピックといえよう。江戸時代の篆書の普及については、篆刻流行の影響も背景として考えられ、そのための篆書知識の要求に対して、篆書字書の必要度は増し、唐本字書の翻刻なども行われたと思われる。その状況の把握は大切な事と考えられる。思えば出版文化が商業的な隆盛を見るのも江戸時代であり、当然のこととして篆書にかかる出版も多数行われるようになる。この出版の隆盛が江戸時代以前とは書体知識の普及を考えてみると、だんな差を作り出すこととなつた。篆書による「千字文」や「唐詩選」の墨本（法帖）の普及例も見逃しできない動きである。

実際に篆書がどのように受け入れられたのか、細井広沢を中心にしての前後の状況とともに考えたい。また碑に見られる篆書、版本に用いられる篆書など、篆書がどの場面に用いられているのかも点検しなくてはなるまい。江戸時代の人々がどのように篆書を受容していったのかの先行研究は多くはない。ここでは研究の方向、方法などを考えつつ、実際の事例を見ながら篆書がどこに使われているのか。その調査の方法、研究環境の現状についても言及したい。

明治維新における公文書書体転換の一様相

—藩士が見た「布達」の書体と記録した「留」の書体—

青山 由起子

江戸幕府は、公文書の書体として「御家流」を重用してきたが、明治政府はこれを継承しなかつた。江戸幕府による「御家流」重用の実体については、まだ多くの検証を必要とするが、書道史において疑われることのないこの重用と明治政府による非継承の事実は、幕府から朝廷へ、近世から近代へ、上意下達を狙つた公文書の書体が、権力の移譲とともに転換したこと示している。

ところでこれまで公文書といえば、主に記述の内容が学術史料として注目され、書体についてはほとんど看過されてきた。しかし、書体がその視覚的形状からあるイメージを発し、そのイメージが社会的な情報を伝達するとみるならば、公文書書体は視覚メディアであり、記述の内容と同様に、見過ごすことのできない史料価値を有しているといえる。

このように、公文書の書体を視覚的な書体イメージとみなすと、明治の権力移譲とともになう公文書書体の転換は、権力と書体との関連を示唆する興味深い現象となる。

では、それはどのように転換したのだろうか。本発表では、太政官、山口藩、鳥取藩、篠山藩の文書から公文書書体転換の様相を探る。前半では、太政官の公文書である「公文録」の書体や、各藩士達が見たと思われる「布達」の書体、また彼らが記録のために書きとめた文書である「留」類の書体を検討する。後半では、明治政府や藩の官吏らが、公文書の書体にどのような認識をもつていたのかという点について、公文書の記録内容から考察する。最後に、それらをもとに転換の状況を読み取り、「政治権力」と「書体メディア」との関連に着目しながら、明治維新における公文書書体の転換という現象が、どのような時代的意味を内蔵していたかについて考えてみたい。

《研究発表レジュメ⑪》

日蓮の消息について —「四条金吾殿女房御返事」を中心に—

川上 大隆

日蓮（一二二二一一二八二）は、鎌倉時代の仏教僧で仏教經典である法華經を弘め、他宗を激しく批判し、鎌倉幕府からは二度の流罪、他宗徒からは襲撃に遭うなど波乱に満ちた生涯を送っている。日蓮の書は、破格、あるいは独自的な書風として知られ、今日、日蓮の自筆は消息、著述、要文集などが一二一通、曼荼羅一二七幅が現存している。

本発表は、日蓮の書の中でも奔放な書風として知られる、漢字仮名交じりの消息「四条金吾殿女房御返事」（東京国立博物館蔵）を中心取り上げ、従来の説を確認しつつ日蓮の消息の特徴を考察するものである。

日蓮の消息は従来、線質が丸く筆使いが自由自在である。人間的性が躍如としている。気迫で書かれ速書きである。長文が多く、信徒への熱い思いが反映している。などの指摘がある。また、小瀬順一氏は「高野切」と比較され、感覚的に藤原佐理の「恩命帖」や「国申文帖」に似ている伝統的な書法に拘束されない自由な書風で、それがかえって力強い筆致になっている。さらに、黒田正典氏は筆跡心理学の視点から、宗教的、社会的行動においてきわめて活動的な性格が出ていることなどを提示されている。

従来の論考の多くは日蓮の消息の紹介的な面が強く、具体的な考察があまりなされていない。そこで、本発表では日蓮と同時代の天皇、仏教僧、歌人などの消息を視野に入れながら、日蓮の書風の特徴について書道史的な観点から考察を試みることとした。特に際だつた特徴としては、日蓮の場合連綿線が曲線で長く続いていること、速書きで、行間や字間に拘らず筆線が長く引き延ばされ、縦横無尽の書法が確認できる。これらの点を、他の消息と比較してみると、日蓮のそれはより顕著で、振幅が激しいことが理解できた。今後、さらに日蓮の書について、内容面や思想面などに重点を置き、その背景を検証し、書と人との関連性を追求して行きたいと思う。

与謝蕪村の書 —書法に表れた漢語認識と和語認識の区別—

魚住 和晃

蕪村の書は、俳人の書、また画人の書、さらには文人の書として、日本の書史に個性豊かに位置づくものである。しかし、これを別言すれば蕪村の文学は、そのすべてを蕪村が自らの手で手書したものであって、これを活字によつてしか見ない今日の文学理解には、いささか肯じえないものを認めざるをえない。つまり、蕪村の手書には、その文学的理念、あるいは詩思なるものが注がれているのであって、その手書性を除去した上で理解が、はたして蕪村の文学の窮屈に到達できるのかという疑問である。上述するように、蕪村の書は俳人の、また画人のと従属的に認識されるべきものではないと私は考える。

蕪村の書は、中国伝統の書法、あるいは日本の書流によるものが微塵もない。全く独自の感性と練成によつて形成されたものである。ここに、その手書に文学的感性が反映されやすい条件が備わるのであるが、その中の一つとして、漢語に対する表現と和語に対する表現に的確な区別が見出される。ここには蕪村の漢語と和語の韻律の相違に対する認識がものがたられていることが察せられ、ひいては手書がその文学性の真意を示しうる一例であるといえよう。上記の見解に立つて、蕪村の諸作を詳細にあたり、その漢語と和語の区別が生み出す書法的関連の分析を試みる。

《研究発表レジュメ⑫》

《研究発表レジュメ⑩》

新出「香紙切」二種二葉考

高城 弘一

近時、書展におけるかな小字作品の多くは、「小島切」「香紙切」など、細身の古筆や伝西行筆系の古筆を背景にしており、それらの古筆を学書の対象とすることが隆盛を極めているようである。中でも「香紙切」には人気があるらしく、これを基調とした作品がずいぶんと見られる傾向にある。

「香紙切」の筆者は、一般的に三十六歌仙の一人で女流歌人の小大君に充てられている。なるほど一般的な「香紙切」の細身で流麗な筆跡は、女筆に充てるのにふさわしい。しかし、江戸時代の古筆鑑定家・古筆見の鑑定によると、意外と多くの断簡に藤原公任筆となつてゐる極札（簡便な鑑定書）が付随しているのが見受けられる。中には、三蹟の一人である藤原佐理や同じく藤原行成と充てられてゐる極札も確認している。書写内容は、平安時代の『麗花集』といふ逸私撰集で、伝小野道風筆「八幡切」とともに断簡が知られるだけである。

発表者は、「香紙切」の書写形式・書風分類、使用かなの嗜好などにより、異なった五種類の筆跡を確認した。そこで、それらを「香紙切」第一種・第二種・第三種・第四種・第五種とし、研究成果を報告し続いている。

今般、新出の古筆手鑑『翰墨城』一帖（個人蔵）の中に、「香紙切」が二葉も収録されているのが判明した。それも、「香紙切」第一種（小大君という極札付き）と「香紙切」第二種（佐理卿という極札付き）とが併存し、書風の相違によるものか、同一鑑定者による極札にもかかわらず、筆者を別にしているのである。料紙についても、新見解がある。

今回の発表では、この新出「香紙切」二種二葉について、古筆学における意義を考察し、報告したいと思つ。

《研究発表レジュメ⑪》

『古今集』仮名序における虚構——安積山の歌をめぐつて——

森岡 隆

延喜五年（九〇五）が奉勅、奏覽いすれの年であつたかはともかく、明年『古今和歌集』（以下『古今集』）千百年記念の年を迎えることになつて、同集仮名序に記された手習い歌の実相を解明したい。すなわち「歌の父母」であり「手習ふ人の、はじめにもしける」と並挙された難波津の歌と安積山の歌。難波津の歌が七世紀代から広く習書・落書されていたことについては検証を果たしたが（『書学書道史研究』九号）、問題は「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなく」という安積山の歌。同歌は『万葉集』卷十六に所収される古い歌ではあるが、『古今集』成立以前の習書・落書の実例が一点も確認されていないのは何とも不思議。難波津の歌と同様、十世紀初頭、すでに手習いに広く用いられていたからこそ、それを追認する形で仮名序に記されたのではないか。

以後、『源氏物語』若紫で両歌が挙げられているとはいえ、手習いの対象は難波津の歌のみであり、安積山の歌は贈答歌に詠み込まれたにすぎない。松花堂昭乘の『八幡山瀧本坊藏珍器錄』所載、尊円親王（一二九八—一三五六）手本二十四種中の「難波津ノ歌二首」が安積山の歌を含めたものと解され、また『実隆公記』明応七年（一四九八）三月二十日条に「難波津、浅香山哥」の手本を揮毫した記事があるとはいゝ、右掲『源氏物語』や謡曲『難波』『采女』等も含め、すべて仮名序を受けたもの。しかも手習い用に廣汎に普及した様子も見出せない。難波津の歌に替わる新しい手習い歌、すなわち七五調で語呂よく、四十七字の仮名がすべて習えるいろは歌が、急速に広まりを見せ始めていたからである。

本論では、『古今集』真名序所載の富緒川の歌が、仮名序で安積山の歌に替えられた事実を把握したうえで、安積山の歌を手習い歌としたのは絶賛之かとされる仮名序作者の創作、虚構との新見解を提示するもの。

第15回大会【特別鑑賞】案内

【特別鑑賞】案内

宇野雪村文庫原拓展示目録

1

- | | | |
|----|----------------|----------------|
| 1 | 西晉·安丘長王君墓碑 | 西晉·安丘長王君墓碑 |
| 2 | 西周·虢季子白盤 | 西周·虢季子白盤 |
| 3 | 新·蔡侯刻石 | 新·蔡侯刻石 |
| 4 | 後漢·三老諱字忌日刻石 | 後漢·三老諱字忌日刻石 |
| 5 | 後漢·賈武仲妻馬姜墓記 | 後漢·賈武仲妻馬姜墓記 |
| 6 | 後漢·延光殘碑 | 後漢·延光殘碑 |
| 7 | 後漢·裴岑紀功碑 | 後漢·裴岑紀功碑 |
| 8 | 後漢·文叔陽食堂画像題字 | 後漢·文叔陽食堂画像題字 |
| 9 | 後漢·史晨前後碑 | 後漢·史晨前後碑 |
| 10 | 西晉·太公呂望表 | 西晉·太公呂望表 |
| 11 | 西晉·魏鄒樞銘並陰 | 西晉·魏鄒樞銘並陰 |
| 12 | 西晉·魏墨華 | 西晉·魏墨華 |
| 13 | 西晉·馬曜等校注韻譜 | 西晉·馬曜等校注韻譜 |
| 14 | 北魏·龍門造像題記十四種 | 北魏·龍門造像題記十四種 |
| 15 | 北魏·龍門遺字(小造像合集) | 北魏·龍門遺字(小造像合集) |
| 16 | 北齊·天柱山銘 | 北齊·天柱山銘 |
| 17 | 隋·龍藏寺碑(旧拓) | 隋·龍藏寺碑(旧拓) |
| 18 | 隋·蘇孝慈墓誌 | 隋·蘇孝慈墓誌 |
| 19 | 唐·爭坐帖 | 唐·爭坐帖 |
| 20 | 唐·大曆中興頌 | 唐·大曆中興頌 |
| 21 | 北魏·廣武將軍碑 | 北魏·廣武將軍碑 |
| 22 | 北魏·孫瓊造像記 | 北魏·孫瓊造像記 |
| 23 | 北魏·鞠彥雲墓誌並蓋 | 北魏·鞠彥雲墓誌並蓋 |
| 24 | 北魏·劉根等造像記 | 北魏·劉根等造像記 |
| 25 | 北魏·蘭亭序 | 北魏·蘭亭序 |
| 26 | 北魏·賜潘貴妃本系(朱拓) | 北魏·賜潘貴妃本系(朱拓) |
| 27 | 北魏·蘭亭序 | 北魏·蘭亭序 |
| 28 | 北魏·張金界奴本(古拓戲鴻堂 | 北魏·張金界奴本(古拓戲鴻堂 |
| 29 | 北魏·帖本 | 北魏·帖本 |

追悼

藤木正次先生を悼む

鈴木 晴彦

去る七月二十九日（木）、本学会常任理事の藤木正次先生が急逝された。享年六十八歳であった。訃報はその日のうちに知った。一瞬、信じられない思いと、夢であつて欲しいとの願いが脳裏をよぎつた。

く頼む」と先生の本務校で私の出講先の大学の授業のことについて言い残された。今年一月の入院以来のこと再入院であった。そして先生とは、この日の電話での会話が最後となつた。あまりにも突然のことであつた。

お一人であつた。同四年に監事に選出され、同六年には理事にご就任、同十年よりは常任理事に就かれ、併せて財務委員長を務められた。財務委員長としては、特に同十二年の国際大会の運営とその財政面の善後処理に心血を注がれ、また手腕を発揮された。

先生はまた、かなの日展作家であり、研究者としては学会の日本部会の振興に

先生はまた、かの日の日展作家であり、研究者としては学会の日本部会の振興にも多大な尽力をされ、学会運営に欠くことのできない方であつた。

この業績は、その著『硯の事典』などによって広く斯界の認めるところであつた。昨年の札幌での大会の折、羽田から新千歳までの機中を隣席させて頂く幸運に恵まれ、学会の将来ビジョンについて、熱っぽく語つて下さった先生の横顔を忘れるることはできない。

先生を失つた喪失感はあまりにも大きい。ここに先生の学界、書道界へのご貢献を改めて銘記するとともに、個人的にも浅学の私を煩を厭わざご指導賜つたご恩に感謝申し上げ、心からご冥福をお祈りしたい。

想

学会十五年目を迎えて

大橋 修一

「会報」担当の澤田氏から「会報の原稿を書け」との仰せである。人様の書いたものを読むのは大好きだが、実のところ自分のことを紙面に白状するとなると、いささか気が引ける。前回の「会報」の筆者的人物紹介によれば「無頼の徒、しかも遠慮なくどこへでもぶらりと姿を現す、命知らずの修ちゃん」として描かれている。が、それは違う。いたつて恥ずかしがり屋で、しかも優柔不斷、実に小心な男なのである。ともかくここは、勇を鼓して近況を述べるしかない。

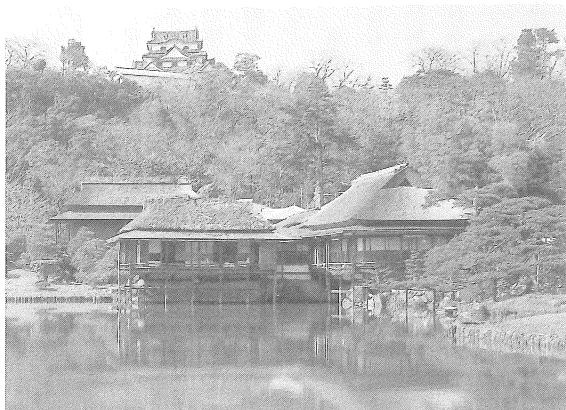
現在の興味の対象は二つある。一つは江戸時代の日・中、あるいは日・中・韓の文化交流史である。一つは、中国の新出土の文物、とりわけ周から秦にかけての金文、竹簡の文字資料である。そもそも江戸時代と、とんと縁のない筆者を日中文化交流史の文化に導いて下さったのは、大庭脩先生であった。先生は事あるごとに抜き刷りを送ってくださり、学会でお会いすると「こんな資料もあるよ」といつもご教示下さった。私は先生から導かれ、中国から舶載された法帖の研究を進めるようになつた。その研究の一端は大学の紀要や2000年に開かれた国際大会で発表させていただいた。中国からの舶載を調べてみると、膨大な量の集帖や单帖、あるいは文房具類が舶載されている事が知られる。『履園叢話』で知られる錢泳も、日本の市場を視野に入れて法帖を出版し、また乾隆から嘉慶時代に活躍した法帖屋の姚經学などは偽帖を作成し、それらの粗悪品が日本の市場に大量に流れ込んでいることも実証的に確認できた。余録としては、「因宜堂法帖」の中に北魏の始平公造像記や司馬駒墓誌、北齊の摩崖や造像記といった北朝書が採録され、江戸時代すでに、法帖によって北書が舶載された事実が資料によつて発見できた。

日本で模刻された法帖については、松坂の韓天寿を第一に推すことができる。彼が模刻した「岡寺山版墨帖」が松坂の繼松寺に存在し、併せ

てその版本149枚が残されていることを知つた。この紹介は現地での、ご住職と北川博邦先生と筆者の対談が、雑誌『字典』8号に掲載されている。またこの韓天寿は、江戸の沢田東江とも親しく、1764年に第十四代將軍家治の襲職賀使として訪日した朝鮮通信使、成大中と品川で会つて朝鮮に渡り、ここでは詳しく述べる紙面はないが、さらに金石家金正喜などの手を経て、清の翁方綱に渡り、ひいては弟子の葉志説の「日本殘碑双鈎本」として著録された。楊守敬はここから『楷法溯源』に多胡碑三十九字を採録した。多胡碑の情報が逆輸入されたことで、多胡碑が日本において再評価されたことを朝鮮の資料と併せて論じることができた。これは昨年の全国大学書道学会で発表させていただいた。

新出土の文字資料であるが、近年膨大に出土した戦国の楚系文字、秦の竹簡類は、隸書や草書、行書、楷書へと変遷していくプロセスを解きあかす重要な可能性を多く含んでいるように思われる。楚系文字に疎い筆者は、主観的な研究に陥らないためにも、池田知久先生の郭店楚簡の研究に参加させていただいた。本来これは「古典学の再構築」といった性格の研究が主たる目的であるが、楚系文字を研究する上でも、文字学、音韻学、考古学、思想史などの幅広い知識が必要であることを痛感させられた。この研究は「郭店楚簡の研究」(四)「性自命出」、訳注として収録されている。今後、浦野俊則先生等と進めている、金文の研究会とも平行しながら研究を続けていきたいと思う。

最後に、亡くなられた藤木正次先生のことについて触れておきたい。先生は知る人ぞ知る文房具のコレクターであり、その質の高さはまさに群を抜き、文献とつきあわせて、実証的に収集された。年に一度の先生のご自宅での洗硯会は最も愉しみの一つであり、誉め上手な先生は、「大橋さん、目が上がったね」と冗談をいつて、文房四宝の世界に引きずりこんでくださった。こうして振り返つてみると、当初からこの学会にお世話になつて過ごした十数年、私は、すばらしい先生方と時間を共にし、ここで育てられたように思う。今、このことを心から感謝したい。今度は、我々が若い人たちを育て導く番であろう。それが、学恩に報い



草 塩 藻 學 書

日下部鳴鶴と彦根

杉浦 妙子

人の運命とは不思議なものである。ある偶然の出来事が重なって大きな展開を遂げる事がある。よく引き合いに出される例として、備中高松城を攻略していた豊臣秀吉が本能寺の変を知り、一日散に立ち戻つて明智光秀を滅ぼした事である。世に言う秀吉の「大返し」である。秀吉が信長の死を知ったのは、たまたま捕えた忍者の口からである。この機動力が後の秀吉を決定付けた。そう考えていくと、人は偶然と必然が複雑に絡み合った蜘蛛の糸の上を歩いているのではないだろうか。

日下部鳴鶴も不思議な運命を

背負つて生きた一人だろう。鳴

鶴は彦根藩に仕えた田口惣右衛門の二男として天保九年（一八三八）に生まれる。次男であつ

たが故に同藩の日下部家の養子となつた。鳴鶴が二十三歳の時、

主君井伊直弼が桜田門外で兎刃に倒れる。この時養父三郎右衛門は供頭として直弼に随行して

いたが、刀に柄袋を被せていた

為咄嗟に抜けず、重傷を負い六

十日後に亡くなるのである。あ

の朝雪が降つていなければ、柄

袋は必要とならず養父は死に至らなかつたかも知れない。

直弼亡き後の彦根藩は急速に尊王派へと転換していく。譜代大名の中でも最右翼として畿内や西国に目を光らせていた彦根藩だつたが、桜田門外の変により幕府から十万石を減封された為、藩が窮乏した事も影響したと思われる。百八十度の転回とはまさにこの事である。

江戸が東京となり、明治に改元された年鳴鶴は上京する。新政府は

「徵士」という方法で広く人材を登用した。広く登用といつても、鳥羽伏見以来の各藩の確執はその底辺に横たわっていたであろう。彦根藩は井伊直弼を配しながらも、この時代上手く立ち回つた。鳴鶴は太政官大書記になり、大久保利通の厚い信任を得た。この頃の官僚は書写能力が大いに要求されたのである。しかし、ここでまた利通が暗殺されるという事態に出くわすのである。鳴鶴は二度、主君と仰ぐ人を失つた事になる。

後ろ楯をなくし、利通暗殺の翌年職を辞した。この時四十一歳、隠居にしては少々早過ぎる齢である。
運命はこれで終わらないから不思議である。鳴鶴が職を辞した翌年楊守敬が来日し、多くの碑版法帖を紹介するのである。この先の鳴鶴の活躍は周知の如くである。

自意と他意、不思議な糸の絡まり合いである。人に翻弄されたくもなければ、人の運命をもてあそびたくもない。しかし、己の意思とは関係ないところで、賽が転がるように運命もまた転がつていく時もある。鳴鶴には生涯に何度もその転機が大波で押し寄せた。

今夏、大津を皮切りに彦根、長浜と旅をした。長浜は秀吉が信長から最初に拝領した城である。東海道線が米原を通るようになつてから長浜はさびれたが、それまでは東国のみならず、北陸にも通じる重要な軍事ポイントであった。四百数十年前、近江長浜の天守閣から、湖面の彼方に聳える比叡山とその向こうにある京の方角を望んで、秀吉は何を思ったのだろうか。（写真＝彦根城公園の玄宮園・八景亭）

博物館・美術館紹介◆東京国立博物館

東京国立博物館の創立は、文部省に博物局が設置された翌年、文部省博物館の名のもとに湯島聖堂で博覧会を開催した明治五年（一八七二）に遡る。

爾来、一再ならず所轄官庁や名称・組織を替えるなど、幾多の変遷を経ながら、今日に至っている。

東京国立博物館の収蔵品数は、公称十万余件。もつともこれは、古美術品以外に考古遺物や歴史資料・民族資料など、多岐にわたる品々を含めた数である。

日本と中国の書跡は、現在三千件を超える。国宝についてみると、日本書跡が一六件、中国書跡が法隆寺献納宝物を含め一二件、都合二七件を数える。現在、館蔵の国宝が全九一件であるから、書跡に占める国宝の割合は、各分野の中でも有外高いといふことができる。

東京国立博物館には、表慶館・本館・東洋館・平成館・法隆寺宝物館の五つの展示館がある。このうち、日本書跡と中国書跡を適宜精選して當時公開している場所が、本館と東洋館である。

【本館】

本来は明治十五年（一八八二）に竣工した、コンドルの設計による旧本館があつたが、大正十二年

（一九二三）の関東大震災で損壊したため、現本館は昭和天皇のご即位を記念して建設が計画され、昭和十三年（一九三八）に開館した。コンクリートの建築に瓦葺きの勾配屋根をのせた「帝冠様式」の代

表的な建築物として、平成十三年（一九三八）重要文化財に指定されている。

二〇〇四年九月一日、本館は従来の陳列体系を刷

新し、リニューアルオープンとなった。まず二階で

は、日本美術の流れを理解しやすいように、時代ごとのテーマ性を強く打ち出し、各テーマの中で特徴

的な諸分野の作品を一堂に集めている。日本書跡が、同時代の美術品や工芸品と共に展示されているの

で、従来にない新たな発見があるかも知れない。また二階の国宝室では、絵画・書跡の国宝を、ゆつたりと静かに鑑賞できる空間を設けている。

一方、一階では分野別展示と企画展示を開催。書

跡については、現在「古筆」の特集陳列を開催中で、

今後「慈雲」や「写経」を予定している。日本書跡は、国宝の「秋萩帖」や「白氏詩巻」、あるいは茶

席の名物「寸松庵色紙」「升色紙」「緋色紙」の三色

紙が揃うなど、写経・古筆・典籍・墨蹟の各ジャン

ルにわたって収蔵品が豊富で、奈良時代から現代に至る日本の書の流れが展望できる品揃えだけに、今

後の展示にご期待いただきたい。

【東洋館】

東洋館は、天皇陛下（当時皇太子）のご成婚を記念して建設が計画され、昭和四十三年（一九六八）、日本を除く東洋の諸地域の美術・工芸・考古遺物を展示すべく開館した。一階から三階まで、螺旋式に

展示場が全10室あり、中国書跡は中国絵画とともに、とりわけ天井の高い第八室で、常時何らかのテーマに沿った展示を行っている。

秋爽の好期を迎える十月・十一月は、館蔵品やご寄託品の中から優品を精選した「中国書画精華」展を開催している。この時期には、国宝の指定を受けた墨蹟の名物や、唐時代の抄本、あるいは指定こそ受けではないものの、黄庭堅の「王史二氏墓誌銘稿卷」や米芾の「虹縣詩卷」、趙孟頫の「蘭亭十三跋」といった、宋元時代の名品をつとめて公開するようになっている。これ以外の時期にも、「清朝碑学派の書」や「明末清初の連綿趣味」など、さまざまな特集陳列を開催している。

博物館の収蔵品は、購入品や文化庁から管理を委託された物件を主とするが、ご寄贈品に負う部分も大きい。東洋館は本館に比して開館が遅いため、収蔵数も決して多くはなかった。しかし、かつて中国書跡の根幹をなした高島コレクションに統いて、近年は林宗毅コレクションや青山杉雨氏・江川吟舟氏のご愛蔵の品々が寄贈された。また、昨年・一昨年には小林斗庵氏より膨大な数の中国印譜および印譜資料をご寄贈いただき、少なくとも印譜に関しては内外に誇りうる質と量を擁するにいたつた。本紙を借りて、改めて衷心より謝意を表したい。

（富田 淳）

●書学書道史学会

会報

第7号

平成16年(2004)6月1日発行

編集・発行
書学書道史学会
事務局

東京都渋谷区桜丘町29-35
〒150-0031 美術新聞社内
TEL(03)3462-5251(代)
FAX(03)3464-8521(代)

◎第Ⅷ期新役員会発足

任期満了に伴う役員改選選挙が、二月十五日～三月十五日を投票期間として実施されました。各位のご協力を深謝致します。選挙管理委員会による開票、当選者決定を受けて、三月三十一日に開かれた第二十四回臨時理事会において、以下の「第Ⅷ期新役員会」が発足致しましたのでお知らせします(6～7ページに役員紹介掲載)。本期新役員の任期は、平成十八年三月三十一日までとなります。(○印=新任)

緊急報告 日本学術会議の「登録学術研究 団体」制度の廃止について

五月八日、日本学術会議から「日本学術会議法の一部改正に伴う制度の変更について」と題する文書が事務局に届きました。

それによると、この四月に国会で「日本学術会議法の一部を改正する法律」が成立し、公布されました。この改正により、日本学術会議会員の推薦制度が変更され、この推薦にかかる「登録学術研究団体」(一、四八一団体=14年度現在)制度も廃止された由であります。本学会では、平成8年度登録の第17期、平成11年度登録の第18期、平成14年度登録の第19期と、三期連続で同研究団体の一員として日本学術会議会員の推薦業務に関わって来ましたが、この地位も失われたことになります。

これを受けて日本学術会議では、同じく四月に開いた総会において、「従前の登録学術研究団体と日本学術会議は、研究連絡委員会の活動等において引き続き連携・協力することとする」などとした決議を採択しましたが、本学会としても今後同会議とどのように関わり、またどのように参加の意義を見出して行くべきか、同会議の組織改革の推移を見きわめながら判断していく必要があるうかと思われます。以上、お知らせします。

(事務局)

【理事長】興膳 宏 (京都国立博物館館長)
【副理事長】杉村邦彦 (四国大学教授) || 国際局長
【監事】田中 有 (天東文化大学教授)
【常任理事】新井儀平 (大東文化大学教授)

大橋修一 (埼玉大学教授) || 学術局長

萱原 晋 (カリタス女子短大講師) || 事務局長

澤田雅弘 (群馬大学教授) || 会報編集・将来計画検討委員長

○杉浦妙子 (二松学舎大学講師) || 会報編集委員長

中村伸夫 (筑波大学助教授) || 編集局長

藤木正次 (日本大学教授) || 財務委員長

古谷 稔 (大東文化大学教授) || 国内局長

河内利治 (大東文化大学教授)

鈴木晴彦 (昭和学院短大講師)

辻井義昭 (北海道教育大学札幌校教授)

鶴田一雄 (新潟大学教授)

○富田 淳 (東京国立博物館主任研究員)

名児耶明 (五島美術館学芸部長) || 講演センター運営委員長

福田哲之 (島根大学教授)

○森岡 隆 (筑波大学助教授)

横田恭三 (跡見学園女子大学助教授) || 普及委員長

浦野俊則 (千葉大学教授) || 選挙管理委員長

野中浩俊 (新潟大学教授)

○菅野智明、下野健児、高城弘一、○弓野隆之

○菅のり子、

学会だより

◆アンケートのお願い

将来計画委員会

本委員会では、将来を展望してさまざまの改善を検討しています。事務局の負担軽減計画もそのひとつです。一局集中の現体制を、諸機関が職掌を分担する体制に改めようとするもので、この3月の臨時理事会では、新体制のフル稼働は18年度とし、移行できる部分から暫時移行する計画案を答申しました。この内、編集局の中心業務である学会誌編集に関する業務は、すでに編集局長のおられる筑波大学・中村伸夫研究室に移管済みです。しかし、本部の所在地については、通信の混乱を避ける必要もあり、現状のままにすることも含めて検討中です。

これらを含む諸問題について、会員各位のご意見を募りたくアンケートを実施します。学会の今後を広く会員皆で検討したいと思いますので、ご協力いただければ幸いです。

1・財源問題について

学会の財源は、会員の会費と賛助会員の会費とからなりますが、創設以来、

4・そのほか学会の将来についてご意見がございましたら、自由にお聞かせください。

賛助会員に過度に依存してきました。しかし15年後の今日、会員数は倍増以上の規模となつた半面、賛助会員は半減以下に減少してきました。この傾向は今後も続くとみられ、財務体質の見直しが急務となつてきました。このことは将来的には会員の会費の値上げとも無関係ではありません。お考えをお聞かせください。

2・役員の任期について

役員体制の新陳代謝を促進するため、役員の任期、定年（現行は被選挙権を70歳未満と規定）の変更や、重任に一定の回数制限を設けてはどうかという意見があります。このことについて、お考えをお聞かせください。

3・事務局の持ち回りについて

事務局の負担軽減の一環として、事務局を持ち回りにしてはどうかという意見があります。しかし持ち回りにした場合、それに付随して事務局の住所がその都度変わるのは如何なものかという意見もあります。このことについて、お考えをお聞かせください。

編集後記

◆今夏、北京・上海・鄭州・洛陽・西安をまわってきた。洛陽では閔林が目あたたが、やはり龍門石窟まで足をのばした。今回気付いたが、龍門石窟のあたりは「氣」が良いのでは？ある書物に「『氣』の良い場所は前屈する」とわかる」とあり、試したところ、手の先が地面に届いた。（小川博章）

◆篆刻美術館で山田正平展開幕（十一月二十三日まで）。『書学書道史研究』十三号の拙稿で紹介した『山田正平作品集』に未収録の印譜「鎮夏鐵筆」や送付時の封筒の住所印など徳富蘇峰記念館収蔵品が展示されていて、うれしく思った。（柿木原くみ）

◆会報編集の助手として仲間入りしたものの、結局どれだけお手伝いできたやら？ 出光美術館にて開催する「書の名筆—三色紙とちらし書き」展の準備も、結構な手伝いをさせてもらいました。そこで、お手伝いできた「習い事」調査の結果である。地殻

○常任理事会（16・7・11／於東京駅ルビーホール）出席者：古谷稔、名見耶明、鶴田一雄、森岡隆、萱原晋、澤田雅弘、杉浦妙子、中村伸夫、古谷稔、

○会報委員会（16・9・20／於本部事務局）出席者：澤田雅弘、杉浦妙子、高城弘一、

○会員動静（会員）：第四十五回毎日芸術賞受賞（二月）

○新井儀平（常任理事）：第六十回日本芸術院賞・恩賜賞受賞（六月）

○中濱慎昭（碩堂）淑徳大学教授。一月二十一日、死去。六十二歳。

○藤木正次（日本大学教授）：七月二十九日、死去。六十八歳。

◆本学会も十五回目の大会を迎えた。一回目を催した東大に戻つての開催となる。惰眠を貪つているうち随分と年月が経つた。発足当時三十代だった会員が理事として働いているのも、時の流れを感じる。

◆最多は水泳の22%。次いで英語、ピアノ。習字は94年の16・8%から7・3%に。調査会社ビデオリサーチが、今年4月、首都圏の3~12歳児に聞いた「習い事」調査の結果である。地殻